

Adult Only

肉体交換

Body Trade

SNS

Social Network Service



Tarota

T S F ドリーム文庫 05

肉体交換SNS

Body Trade Social Network Service

Tarota



肉体交換SNS

T
a
r
o
t
a

第一章。	女になったら、オナニーなう	0	0	6
第二章。	女になったらレズっっちゃう事もあるのね	0	4	5
第三章。	女になったら男とシっちゃう事もあるよねえ	0	6	6
第四章。	男に戻っても、また交換のチャンスだってあるよね	0	9	3
第五章。	女の子と入れ替わった僕達が上る階段とは	1	1	9
第六章。	女の子になり続ける日々	1	5	6
あとがき		1	9	2

登場人物紹介

Characters

きぬつき かりと
衣月 雁斗

… 主人公。暇を持って余しすぎてヤバイ。

おおうち まさおみ
大内 雅臣

… クラスメイト。

いおりがわ みさ
依織川 美沙

… 隣のクラスの美少女。おっぱいが大きい。

ありい いりあ
有井 伊里亜

… ちんまりとした可愛い少女。

はたばた ふみか
旗端 芙美香

… モデル業をしている年上の女性。

ゆり
由梨さん

… 芙美香のモデル仲間。

第一章。女になったら、オナニーなう

一ヶ月前迄は肌寒い位だったのに、汗ばむ陽気は初夏すらも感じさせる。大型連休を前にした抜群の青空の下であつても、僕の気分はちつとも晴れやかでは無かつた。

四月から始まった新たななる学園生活も、結局は以前と同じ事の繰り返しで、すぐに新鮮味を無くしてしまつた。新たな人間関係を構築するのも何だか面倒臭かつたし、恋人を作ろうなんて勇氣も持ち合わせていない。部活動も色々検討だけはしたんだけど、勧誘期間を過ぎたら乗り遅れた氣になつた。そんな風にして新しい生活でのスタートでのんびりしていたら、すっかりクラスで孤立してしまつた。

だから絶好の行楽日和なんて煽られても一緒に出掛ける仲間もいないし、昔の仲間を集めようとかつて積極性も僕にはない。趣味らしい趣味も持ち合わせていないから、大型連休を潰す目処も特にない。そういえば春休みも結局は、食事と睡眠とオナニーばかりの怠慢ライフで費やした事を思い出して溜息が出てきた。

「よう雁人。なに黄昏てるの？」

机に突つ伏してボンヤリと昼休みという時間を潰していた僕に声を掛けてくるのは、眠気眼を巡らせるまでもなく大内おおうち 雅臣まさおみに決まつている。彼はクラスに一人はいる、誰とでも話し掛けて友達になろうとするタイプの人間だ。孤立している僕にも一日一回はこうして接触してく

る。ちよつとうざったい時もあるけど、僕にとつても気が晴れるから助かってはいる。

「別に……暇しているだけだよ……」

「ならば、ハンギルの新イベ始まったから進めといってくれよ」

「ごめん。あのゲーム……あんまりその……僕に合わなかったから……」

進学祝として親に買って貰ったスマートフォンも、ここ数日は起動すらもしていない。入学初日で物珍しく弄っていた僕に、雅臣が自分の嵌っているソーシャルネットワークゲームを薦めてきたのが会話の始まりだった。一月も経っていない筈なのに何だか懐かしく思えてしまふ。

「そうか……じゃあさ、激ヤバなアプリを発見したから、お前もやろうぜ！」

雅臣が身振りでスマホを出せと催促してくる。

「またソーシャルネット系？」

しぶしぶと鞆から取り出しながら尋ねる。ゲームも結局のところは招待特典つてのが目当てなだけだったから、何か裏があるんじゃないかと勘繰ってしまふ。

「うん。そうだけど……会員紹介制で、好奇心がソソられる超面白そうなサービスだから、暇を持って余しているお前には丁度いいと思うぜ！」

ロック解除し、雅臣からの通信を受信する。シンプルな僕の待ち受け画面に、黒地に赤い文字で『交』って書かれたアイコンが増えていた。

「何これ？」

「いいからまずは起動してみろよ」

ダブルタップして暫しの起動時間の後に、画面一杯に承諾書とかかれた文章が表示された。僕は眩暈を覚えながら、どうせいつもの事だろうと読み飛ばしてスクロールさせて、最後に表示された『承諾』のボタンを押そうとした。

「ピリっとするから気をつけるよ」

雅臣の言葉を聞いた時には既に遅く、僕の脳髄に痺れるような感覚が駆け抜けた。

「んろう」

情けない声を上げつつ、目尻に浮かぶ涙を拭ってスマホを見ると、そこには……

『名前…衣月 雁斗（きぬつき かりと）

性別…男性

生年月日……』

と僕の詳細なプロフィールが表示されていた。

「え？ 僕まだ何も入力してないよね？」

「何か良く解んねえけど、俺の時もそうだったぜ。多分生体認証ってヤツなんじゃん？」

絶対に違うと思うながらスクロールして確認してみれば、自分でさえ忘れていたような細かな情報まで記載されている。趣味の欄が『オナニー』と表記されているのには、ちょっと凹んだ。

「それで……これは自分再発見ツールかなんかの？」

面白くなさそうに呟く僕の言葉に、雅臣はテンションも高く答えた。

「違えよ……これは『肉体交換SNS』だ！」

「は？」

「だから……身体を交換して人生をエンジョイしてみませんか？ っていうそういうサービ

スだよ。多分誰か暇なヤツが考えたんだろうな。お互いのプロフィールを見ながら、俺がお前
だったらっていう妄想を練り広げる為にあるんじゃないかねえの？」

「ははは……何だ、ごっこ遊びか……」

いきなり非現実的な事を言われて動揺してしまった。

「でもよ……ちよつと『同年代』『同一地域』『女性』『バスト：90以上』で人物検索してみ」

「最後のは雅臣くんの趣味でしょ？」

プロフィール画面の上部にあるメニューバーから検索機能を探し、言われた通りの条件を選
択してみた。するとズラリと結果が写真付きで表示される。

「あれ？ これ……隣のクラスの依織川さん……」

「そうそう。彼女の写真をタップしてみ」

すると、僕に関しての記述程でないにしても詳細なプロフィールが表示された。

「あ……バスト……92……」

「興奮するよな！ まあ、そこも大事なんだけど……この表示！」

それは依織川 美沙（いおりがわ みさ）という名前の横の表示で、大きな赤い文字で『貸出中』と点滅していた。

「貸出中？ 何が？」

「このサービスの概要だぜ……何がって言ったら『身体』に決まってんじゃないかね？」

「まさか……」

ポプカットで愛らしい顔立ちの彼女の中身が、今は別人になっている。大きな胸が逆にコンプレックスとなつて、誰かに身体を貸し出したのかもしれない。そう思うと妙に興奮してしまふ。

「じゃあさ。彼女のクラスに行つて、様子確かめてみるか？」

「ええ。でも普段の彼女を良く知らないから僕らじゃ解らないよ」

「そりゃそうだ。けれども何か興奮するだろ？ ひよつとしたら中身は男なのかもしれないねぜ？」

「ええ！？」

それは考えもしなかった。それじゃあ、大きな胸を揉み放題触り放題されていると言うのか！？

「誰に貸されているのか解らないし、まあきつと単なる妄想促進用なんじゃねえの？ とにか

く検索してみると色んなヤツのプロフィールも覗けるし、こんな風に『貸出中』になっているヤツも結構いるから、あれこれ考えてみると暇つぶしに持っただけだぜ！」

そこでチャイムが鳴って雅臣は離れて行った。午後の授業が始まったけれど、頭に入る訳もない。僕の頭の中をぐるぐると駆け巡るのは、依織川さんが本当に誰かに身体を貸しているという妄想だ。クラスメイトの貧乳女子に、文字通り胸を貸すという線で最初は考えていたのに、雅臣に言われた所為で男と身体を交換していると思えてしまう。

男が依織川さんになって女子学生ライフを満喫している。堂々と女子更衣室に侵入し、可愛い顔を歪めてはクラスメイトの着替えを堪能する。女同士の気安さで胸を触ったり、大きな胸を揺らせて身体を動かし、女子トイレで依織川の排尿行為を肩代わりしているのだ。当然、その肉体の隅々までを男に鑑賞され、触られては女性の快感を知り尽くされているのだ。

この妄想だけで僕の股間は激しく膨張しては、机の底をキックしてしまう。

そうだ。もしかしたら依織川さんも、男の肉体で興奮状態に苛まれているのかもしれない。けれども肉体交換が相互了承の上だったら、依織川さんも女の生活に疲れていたのかもしれない。男になってみたかったのかもしれない。だから、ひよっとしたら男のオナニーを楽しんでいるのかも。

そう考えると本当に興奮が止まらなくなってしまう。

放課後ドキマギしながら隣のクラスを覗きに行ってみただけでも、やっぱり依織川さんの事

を良く知らないから違いなんて解る訳もない。けども疑いの念を抱いてみれば、友達と思いき女子生徒に絡んだ時の目元や口元が妖しく歪んでいるように思えてしまう。

もし借りれるのだったら、僕も依織川さんのご機嫌な肉体を使ってみたい。女学生ライフだったら、きつと今と違って楽しいんだろなあ……妄想に耽りながらスマホのアプリを立ち上げ、帰りの道中も自宅に帰ってから、このサービスの内容を熟読してしまう。

解った事は、検索やら紹介機能やらを通じて知り合った人物と、交換条件を決めて身体の貸し借りをするという事だった。誰が貸し出し中なのかは解るものの、誰に貸し出されたのかは解らない。レンタルDVDならぬレンタルボディと言った感じのシステムだ。

もつとも、ここに書いてある事が本当だとしてだ。だって肉体交換なんて、どう考えても空想の世界の出来事だ。壮大なごっこ遊びサービスだと考えるのが一番納得がいく。

だって、このサイトの通りだったとしたら、かなり多くの人間が気軽に身体を交換しているという事になってしまう。僕らみたいな学生からサラリーマンにOL、それにスポーツ選手とか俳優だって登録されている。

今テレビに映っている可愛らしいアイドルも貸し出し中だ。生放送だから中身が違ったままで出演しているなんてありえる筈もないよね？

けれども、つい悲しいかな、中身がそのアイドルのファンのキモオタで、ノリノリでやっているなんて想像をしてしまう。そして僕が彼女の身体を借りたとしたら、なんて妄想にまで発

展して……趣味の欄があんな風に書かれるのも無理もない自家発電に僕は勤しんでしまった。

翌日、大変に励んで眠たい頭を振り払い、珍しくも僕の方から雅臣に声を掛けた。

「おはよう雅臣くん！」

ところが雅臣は呼ばれた事に気がついていない様子だ。肩を叩きもう一度声を掛けて、ようやく振り返った雅臣の顔はどこかヤツレ気味だ。きっと僕と同じように妄想して励んでしまったのであろう。

「あ……おはよう……えっと……」

雅臣はそこで手にしたスマホを覗き見る。

「衣月 雁斗（きぬつき かりと）くん。えっと……おはよう雁斗お！」

「雅臣くん……何か変だよ？」

「え？ どこが変？ 俺はいつだって絶好調だぜ？ ああ……ハンターズギルドのイベント進めようぜ！」

それから二三と言葉を交わしたけれども、雅臣の様子は明らかに不審だった。手元のスマホを眺めてばかりだし、たまにチラリとこちらの事を見る目つきが、どこか艶かしく絡みつくようなのだ。思わずゾクゾクっと悪寒が走り、お尻の穴がムズ痒くなってしまう。

それにトイレに行こうとするとついてきては、隣のスペースに陣取っては僕のを覗こうとするし、いたしている最中は妙にいい笑顔を見せている。まさか、と直ぐに思い当たって自席に

戻ってからスマホのアプリを立ち上げる。招待者である雅臣は友人設定になっているから、すぐにプロフィールが呼び出せる。

「やっぱり……」

大内 雅臣（おおうち まさおみ）の名前の横には、何度も見た『貸出中』の文字が点滅している。すると本当に身体の交換が起きているのだろうか？

それとも単に『貸出中』にする方法を発見し、単に周りをからかいたくて演技しているのだろうか。雅臣の事だから何人も誘っているのだろうか、この遊びを楽しんでいるだけの可能性も高い。

演技だとしたら……相当に設定を練り込んでいるよなあ……

もし本当の事だったならば、どう見ても中身は女性なのだ。最初の言葉遣いといい、視線とか髪を掻きあげるような仕草とか女性っぽく見える。いつから『貸出中』になったのか把握していないが、恐らく昨夜からなのだろう。きっと雅臣の身体でオナニーを堪能し憔悴したのだろう。

そしたら、雅臣の方は女性の身体で同じように快感を堪能し、今頃は同じように不審を振りまいているのかもしれない。どんな女性と交換したのかは知らないが羨ましい限りだ。

羨ましい？

別に同性同士で身体の貸し借りをしてもいいのに、僕は女になりたいと何て思っているの

か？

よく解らない。

性転換手術を受けたいなんて考えた事もないし。

けれども、ソーシャルネットワークサービスという気安さからか、身体をちょっと借りるだけという言葉からか、ちよつとだけなら女になってみたいと考えてしまう。

誰か……適当な女性に……僕も身体の貸し借りを申請して……

そうしたらば、これが本当の事なのかはつきりと解るだろう。もし嘘だったら演技しなきゃいけないが、本当だとしたら……昨日散々したのに反応してしまう。

けれども、もし申請して断られたら？

どこにでもいる平凡な容姿の写真に、冴えないプロフィールは明らかに魅力的ではない。だからもし、自分が魅力的な女性だったとして交換の申し出を受けるだろうか？

どう考えても良い回答はできそうもない。

「はあ……」

そんなことばかり考えて授業は全然頭に入ってこない。そして考えても考えても最後に出るのは溜息だ。だから結局のところ、僕に出来るのはこうした妄想を抱えたままに興味に没頭するしかないんだよな。アプリを立ち上げて『貸出中』で検索し、雅臣がどんな女性になったのかという妄想で抜こうとして、僕のプロフィール画面に異変がある事に気づいた。

「交換申請が1件あります」だつてえ!？」

裏返った声で朗読してしまう。震える指先で僕は、そのリンクをタップする。

「初めまして、こんにちわ。私もオナニーが趣味なの。男の子の感覚を知ってみたいくて申請してみました。お互いに新しい快感を堪能しましょ。年上のお姉さんの身体じゃ嫌かしら？」

メッセージと共に表示されている写真はショートカットの大人の女性が写っている。伏し目がちな瞼に長い睫が乗っていて、やや釣り上がった眼は怜悧の刃物のようなクールさを感じさせる。整った顔立ちは知的で冷徹な印象を与え、真っ赤なルーージュにアイシャドーと大人の色気を見せ付ける。いや、その最たるはドレスの胸元を押し上げる膨らみと、くつきりとした谷間であろう。

「こ……こんなお姉さんが……僕と……身体の交換を？ ははは……いたずらだよねえ……」
 写真の印象とメッセージが結びつかず、乾いた言葉を吐き出しながら僕は震える指先で相手の写真をタップした。すると相手のプロフィール画面に飛ぶ事ができた。

名前…旗端 芙美香（はたばた ふみか）

年齢…26

職業…モデル 兼 エッセイスト

「モデルさんなんだ。流石、僕よりも身長は高いし、スリーサイズの事は正直良く解らないけど、胸もなかなか大きい……」

それでも依織川さんには及ばないから、彼女の胸は特別製なのだろう。

「それにしても、このプロフィール画面……」

初体験の話とか男性との性交回数とか性感帯とかまで細かく列記されている。今まで覗いていた他人のページとの違いは、本当に身体を交換しあうなら相手を深く知っておいた方がいいからではないだろうか。

ゴクリと喉が自然に鳴った。

僕が芙美香さんのような大人の女性となつて、その肌で感じるもの全てを体験する。鏡でじっくりとあれこれ観察したり、あちこち弄つたりしても全然良いというのだ。何しろ交換条件に書かれていたのは、期間は三日でその間に中だし行為以外は何をされても良いというのだ。

『お互いに新しい快感を体験しましょ』

メッセーজの一文が頭を駆け巡る。こんなお姉さんでも、僕のような男になつて異性を体験してみたいっていうのだ。僕の股間はさつきから暴れっぱなしだ。もし替わったら芙美香さんもきつと手を焼く事だろう。

「そしたら間接的にお姉さんに弄つて貰える事になるんだぞ。幸せモノだぞこいつう」

人差し指で小突き、その指先をそのままスマートフォン画面に移行させる。そしてメッセージを呼び出して、承諾の返信ボタンをドキドキしながら押す。すると長い文章が表示された。規約かなんかだろうけど読む気なんか起きる訳もない。読み飛ばして『本当に宜しいですか』

の問いに『はい』と答える。

変化に備えた次の瞬間に何も起きなかった。スマホの画面は『返答を送信しました。相手の承認を待ち下さい』と表示されている。

「ははは……緊張して損しちゃったよ」

何だか拍子抜けしてしまい。さっきまでの興奮状態はこの空、一種の賢者状態に陥ってしまふ。それから暫くは何も起きず、夕食を済ませて部屋で再びあれこれと考え、もし本当に明け渡すならば風呂呂に入って粕とか綺麗にした方がいいかなあ……なんて思いを巡らせた頃、それは突然起こった。



夢から急に醒めた時のような、前転と後転を繰り返した後で急に止まってみたような。意識の混乱がまずあって、気がつくとい僕はスマホの画面に指を乗せていた。

いやいや……

青いフレームだった僕のスマホは、こんな薄いピンク色ではないし、何より乗せている指先が違っていていやしないか。赤く塗られた長い爪も、白く細長い指先も手の甲も自分のじゃないって実感できる。けれども画面に触っている感覚はする。それに表示されている『あなたのマイ

ページ』の写真も名前も自分のものではない。

「旗端 美香……」

読み上げた声も自分で出した筈なのに、全然違うハスキーで張りのある女性の声だ。

「まさか本当に……」

声を響かせながら自分の体を見下ろして、世界が変わった事を実感した。僕は薄い絹のような衣を身に纏っていた。そこから透けてみえる自分の今の身体には、はっきりと解る乳房の存在がある。谷間を作る大きな双球には形の良い乳首がちよこんと乗っている。そんな障害物からチラチラと覗く足先も、今や形が全然違っていた。

「こ……これ……この身体ってえ」

声を上擦らせながら、僕は色白い新たな手を動かして自分の胸に備わったものを確かめてみた。柔らかな感触が掌一杯に広がった。続いてこそばゆいような感覚が胸から伝わってくる。おっぱいがついている。僕は感動しながら、新たななる装備品を愛しむように撫で回す。

柔らかく弾力があって、気持ち良くて心地良くなって、重たくてタプタプ揺らすのが楽しくって。いつまでも触り続けていたい誘惑が詰まっている。弄り回しているだけで何だか凄く心地良く、激しい勃起に苛まれそうだ。

「ああ、そうか。今の僕のアソコって……」

障害物に邪魔されて見えないが、男のアレがついている訳はない。確認の為に向けた両手は

虚しく空を切り、ぺたりと股間に張り付くだけだ。

「女の人って本当に付いてないんだ。当たり前だけど不思議な感覚……」

喪失感を寂しく思うが、見えないけれども僕のアソコには女性器が備わっているのだろう。エッチな本でもはつきりと見せてくれない秘密の花園が。見たいし触れたいし、とつても興味がある。

僕は改めて自分が居る室内を見回した。僕が立っている前にはテーブルがあり、左手の方角には大型の液晶テレビが鎮座している。右手の方角には食器棚があつて奥はキッチンになっているようだ。どうやらここはリビングルームのようで、前方には暗がりとなっている廊下があり、後ろを振り向けばベッドとかドレッサーとか筆筒とかが見える。

事前に見たプロフィールではマンションに一人暮らしとなっていた。だから僕は気兼ねなく背後に向き直ると、ベッドルームの方向へと進んだ。その為の一步を踏み出して、今までの動かしていた身体との感覚の違いを如実に知った。柔らかな全身がプルンと震えるような感覚で、胸も尻も弾むように動くのだ。

「ああ……なにこれ……すごい……」

つい楽しくなつて身体を揺り動かしては全身の感覚を堪能し、最後はジャンプして弾む胸の感覚を楽しんだ。着地するときの脚の柔らかなバネやら、身体に纏わりつく衣擦れまでもが心地良い。

「ああゝ もう……本当に世界が違うよ」

歓喜の声を上げながら自分の全身を撫で回してしまう。何てことだろうか、僕は歩行もまともに出来ない程に新しく得た身体を気に入っている。

思わぬ快感に打ち震えながらも、当初の目的を遂行すべく歩み始める。僕が向かっていたのは、ベッドの横にしつらえられた全身が映る鏡だ。鏡台もあるけれど、やっぱり全身を映してみたい。

「ふわああ……これが今の僕かあゝ」

プロフィール画像で何度も見た、クール美人が映っている。薄衣から剥き出しの乳房や臍なんか透けて見えて、とてもセクシーな光景が広がっている。こんな大人の色気を放つ女性が、今や僕の身体だというのだ。その証拠に腕を上げれば胸が揺れ動く感覚がして、鏡の中では女の人が腋を思いつきり見せ付けて流し目を送っている。

「ふわああ……たまらないよお……」

何度も口になっているけど、声もまた色気をたっぷりと含んでいて耳に心地良い。

「んふっ雁人くんだったらいけない子ね！」

自演しながら空いている左手で胸を鷲掴みしてモミモミとする。本人がどんな口調なのか解らないけれども、本当にお姉さんにエッチな悪戯をしているみたいだ。そして、エッチされている方も僕なので頭が混乱してしまいそうだ。

「お姉さん……凄くエッチですよお」

「あゝん雁人くんになら全部見せてあげてもいいのお」

なんだかちよっぴり虚しさを感じなくもないが、頭の中の興奮は頂点に達している。何しろ薄絹越しの女体が身悶えているのだ。中身を見てもいいよね！

僕はノースリーブの肩紐を摘むと、色っぽい仕草で脱衣の覗き見をする。全部脱いだならば向かい側には、黒いパンティーだけを身に纏った女の裸身があった。重たい瞼から放たれる視線が、見咎められているようで何だかイケナイ気分になってくる。

「単に見ているだけなのに……何だか凄くソソる表情だな……」

僕は芙美香さんの侮蔑するような視線を浴びながら、お姉さんの手を使ってその白い裸身を撫で始めた。直接触る乳房は吸い付くようでモチモチしていて瑞々しくって、なんだろう搦き立ての餅のような、生マシュマロって言葉が具現化したような……いやどれも違うう正に生おっぱいの感触だ。乳首の部分も弾力があって楽しいし、弄られている感覚が仄かにだけど確実に心地良い。

「揉み心地最高ですよ……芙美香さん……んん」

段々と僕は大胆に揉みしだいていった。指が乳房に沈み形が変形する。捏ね繰り回すのが楽しいし、指先が触れる先端部分からの気持ちよさが増大してきた。それでかき回すような仕草をしてみると、快感と呼べるレベルまで到達してきて、もっともって弄ってみれば乳首が増大

していくような感覚が生まれる。

「ああ……起ってきた……本当に乳首も勃起するんだ……」

自分の乳房を弄って恍惚の表情を浮かべる芙美香さんの姿が鏡に映っている。その姿を見ていなくても興奮するし、快感を有しているの僕なんだ。けれども、何だか物足りない。そう、今の僕にはすぐに反応しちゃう相棒がないんだ。

「だけでも……ふふふ……」

僕の視線は黒い布で覆われた股間部分に注がれていた。ピッチリと覆う布の中では、切ない疼きが生まれている。その事を今の僕は身を持って知っているんだ。

「それじゃあ芙美香さんの全て、見せて貰うね！

いいわよ、雁人くんになら……」

自分で返事をしながらドキドキと、履いているパンツを脱いだ。薄い恥毛に覆われているだけの、すつきりとした股間が姿を現す。

「ついてないって、やっぱり変な感じだよなあ……」

生まれてからずっと僕にぶら下がっていた男の象徴が見当たらないのは、寂しさにも似た不思議な気分がある。けれども今は替わりに女性器がある筈だ。僕はそろそろと指先で、こんもりとした丘のような部分を触っていく。

「あ……この溝の部分がそうなのかな？」

指では何となく探り当てたけれども、鏡の方ではうまく見れない。このまま弄るのも何だか怖いし、やっぱりちゃんと観察してみたい。それで僕は全身鏡の前にドレッサーに付属している椅子を動かして、座りながら作業をする事にした。

長い両足を椅子の上に乗つけて、大きくM字開脚した痴態を晒す芙美香さんが僕の前にいる。エッチなその姿に飛びつきたくなるが、今は僕が彼女なのだから無理だ。代わりに女体の神秘を暴く事にしよう。

「芙美香さん、ごめんね。見せて貰います……」

つい謝りながらも、僕は溝の両端に当たった指先で広げていく。くぱあ……とか脳内で音を補完しながら、鏡の中で広がっていく中身を凝視する。

「これが……女の人の……部分なんだあ……」

初めて見る光景に興味深々なのだが、神秘的な感動よりも先に、口の中を覗いているような感じのグロテスクな感情が沸き起こって、ちよつと引いてしまう。考えてみれば、これも体内の光景なんだから当たり前か。

「赤貝って呼ばれたりするけど……何となく解るなあ……」

思いつきり広げて更に観察し、穴が二つ並んでいるのを確認する。確か下の方が膣に通じているヤツだったと記憶している。

「ここに、オチンチンが入るのかあ……」

入れてみたいと思うが、今はそれは叶わぬ夢だ。逆に入れられる立場な訳で、何かを突っ込んで女の感覚を体験する事ができる。勿論興味もあるけれど、いきなりはやっぱり怖い。それで女の人の感じる場所として、もう一つの候補を思い出した。

大きく開いたアソコの上の方、付け根にある小さな突起部分がソレだ。さっきから何だかジンジンって感じている。

「クリトリス……だよ。これが」

僕は両指を離すと覚えた位置に指を滑らせる。

「ん……痛っ」

力加減を間違えたらしい。皮を被ったままだった頃の、おちんちんの先端部分を弄った時みたいな感じだ。どうやら敏感な存在らしい。

恐る恐ると僕は指を這わせて、そーっとそーっと弄ってみる。

すると、さっきと違って何となく心地良い。けれども想像していた程ではない。

「女の人の快感は、男の一億三千倍って聞いてたのにいゝ」

弄り方が悪いのか痛い感じの方が強い。

「そうだ！ 性感帯とか書いてあったよな」

そんな情報を思い出し、僕は乳房をプルンプルンと揺らせながら、スマホを取りに居間へと戻る。他人の機械を勝手に触るのにちよっぴり罪悪感があるが、そもそも身体をこんだけ弄くっ

ているんだし、今は僕の物って事になるからいいんだよね。

ロック機能を解除しようとする。パスワードの入力を求められる。けれども何故か頭に数字が浮かび、その通りに入力したら上手くいった。脳が覚えているって事なのだろうか。ちょっと不気味に感じるけれども、それより今はデータの確認が先だ。

「ええっと……って何だこれ？」

画面に表示されている『旗端 芙美香』のプロフィール画面に、今まで見た事の無いアイコンが表示されていた。それには『肉体操作マニュアルダウンロード』なんて書いてある。さすが僕はそれをタップしていた。暫しのダウンロード時間の後に、画面表示に従ってその電子情報を開いてみた。

「こ……これは……」

それは芙美香さんに関しての超個人的な情報の塊だった。目次を読んだだけでも、住居とか仕事とか交友関係とか広範囲に書かれているようで、芙美香さんとして生活するのに必要な事柄が網羅されているようだ。そういうえば、誰かに貸出されていた時の雅臣くんが、やたらスマホに眼を通していたけれど、それはこういう事だったのかと思ひ当たる。

「いいのかな……こんなに色々知っちゃって……」

けれども僕の情報も芙美香さんにバッチリ見られちゃっているのであろう。尤も、そんなに困るような大した情報なんてないけども。そう思っていたんだけど、目次のある項目を見て頭

を抱えた。

「オナニーのやり方あ。こんなまで書いてあるのお!？」

本人以外知らない事柄だが、自分でこんな開けっ広げな事まで書く訳もないだろう。そもそもプロフィール欄だって、自分で記述してないのに色々な事が書かれていた。記憶から直接転写されたとしても、今の技術でそんな事が出来るとも思えない。

いや体の交換そのものだって、悪魔とか神とか宇宙人とかオカルト領域の仕業としか思えない。気味悪くもあるけれど、すでに利用しちゃっているんだから手遅れだ。だから僕は難しく考え込むのをすぐに止めた。

ざっと眼を通してみれば、普段どんな風に処理しているのか細かく書いてある。芙美香さんにも僕のズリねたとか、性癖とか色々知られちゃったって事だよ。恥ずかしいと思う一方で、こっちも知る事が出来るんだからお相手だよ。

いや、それどころか実践だって出来ちゃうんだ。元々、今回の身体の交換は『異性の快感を知ってみよう』が目的みたいなものだから、やってみなくっちゃ損だよ！

なんて論理武装つぼくしてみたけど、元々勝手に弄っている途中でした。

僕はスマホを片手に再び鏡の前へと舞い戻る。そして再び大きく脚を開くと、スマホに表示された『女性器の取り扱い方』に眼を向ける。

「なになに……まずは手を洗います。女性器はデリケートなので雑菌に気をつけてね!」

……いきなり気を逸らされてしまった。けれども確かに大切な事なのかもね。僕は手順に従う事にし、そしたらまずはマニキュアの落とし方なんてのもレクチャーされたりで、思わぬ遠回りを経て再びやり始めへと戻る事が出来た。

「気になる人や想い人を思い浮かべながら、指先で優しく撫でるようにゆっくりとマッサージを開始します」

具体的に俳優さんの名前とか書かれていたけれど、男を相手になんて僕には高度過ぎる。だから鏡の映像をそのままに、芙美香さんにおちんちんを弄られているイメージを進める。細い指先で先っちょを撫で回されている気分だ。小さいとはいえ、実際に感覚も似ているから……何だか段々と心地良くなってきたぞ。

「あ……何だか奥の方がジンワリと心地良くなってきた……なんだか股間がジュンッとする」
思い切って女性器を広げてみれば、奥から液体が染み出してぬらぬらつと妖しく輝いているのが解る。愛液とか言われる潤滑油だって事くらい僕も知っている。

「これが女の人の濡れるって感覚なんだあ」
湧き出す蜜を掬ってみると、ついつい指先で遊んでから嗅いでみてしまう。噂どおりに無臭で無臭だった。それから手順に書いてあったように、掬った液をクリトリスに擦り付けて再び指でクリクリつと刺激する。

「ん……あは……何だかどんどん気持ちよさが募ってくるぅ」

鏡の中では芙美香さんが、眠たい瞳を潤ませて恍惚の表情を浮かべている。乳首だって隆起して、凄くエロチックでそそられる。だから左手で乳房と先端を弄る事にして、右手はそのままクリちゃんのお相手だ。

同時の刺激が本当に心地良くて、頭が快感でいっぱいになる。

「んはあ……いい……芙美香さん……の身体良いよお〜」

男と違って射精感覚が上ってこないから、どこまでいつまで弄り続ければいいのか解らなくて気が変になりそうだ。

「ふはあ〜」

暫く弄り続けたら心地良い疲れが襲ってきて、何だか満足してしまった。吐き出す息は熱く、頭の中にもアソコの部分にも、痺れにも似た快感が残っている。男のような賢者の時間とは違う、漣に身を委ねているような心地良いアフターオナニーだ。

「女の人ってズルイかも……」

そんな風に思ったのだが、実際はもっと凄かった。実は僕が体験したのは、女の快感〜序章にすぎなく、絶頂と呼べるものではなかったのだ。それというのも途中からマニュアルに従わず、自分に身を任せて思うが儘に弄ってしまったのがいけなかった。

「今ので軽いのだったら、イクってのはどんな感覚なんだ……」

僕のオナニーライフはまだ幕を開けたばかりなのだ。



まだまだ中途半端な快感だと判ったからには探求の手を緩めたくはなかったが、次の新たな異性体験が逼迫していた。即ち生理的な現象であるところの一つ……お手洗いに行きたくなつたのだ。部屋数も少ないから解るけれども、一応スマホで位置を確認して向かう事にする。

裸のままだから再び胸がタプタプと揺れて楽しい気分だ。いつもの癖で便座を全て開けてしまいが、椅子の部分だけは戻す。今は座つてするしか方法はない。その事に関しては、小水が放出される穴までも確認済みなのだから議論の余地は無い。

「それにしてもやっぱり……頼りない気分だよね」

ホースを通したやり方しか経験がないから、どこに向けて飛んでいくのか不安になってしまふ。それでついつい腰を引かせて狙いをつけようとしてしまい、そうこうしている内に漏れ出しそうな感覚が襲ってくる。

「んほお!？」

甲高い奇声が僕の口から零れた。少し出るのを遅らせようなんていうコントロールが出来ずに、いきなり溢れてしまったからだ。そして、その勢いが思っていたよりも強くて、尿道から直接放出されるような初めての飛沫が噴出する感覚に驚いたからでもあった。

「ああ……僕、女の人の小便を体験しているんだあ」

平らな股間の隙間より黄金水流が放たれているのを目視する。覗き見気分が沸き起こってき
て、何だか妙に気分が昂ぶってきた。すると、何だか陰唇を擦られているような気持ち良さま
で生まれてきた。

だから、終わった後には拭くという情報に基づく行為に及んだ時に、ついつい紙をあてがっ
たままに余分に擦ってしまい、それで再び気持ち良くなりたくなって、さっき学んだオナニー
の二回戦に突入してしまう。

「やばい……僕……この快感が……癖になりそう……」

たつぷりと芙美香さんの女体を弄くり回し、再び快樂の波に身を委ねながらボンヤリとした
頭でそう思う。こんな快感を知ってしまったからには、男に戻った時にツマラナイと感じてし
まうかもしれない。だって、こんなに気持ちよかったのに、まだ不完全燃焼なのだから。

勢いで始めちゃったけれども、やつぱり絶頂を感じてみたくて、僕は今度こそスマホの情報
を熟読しようと思えば座を後にした。

したんだけど……何だか裸のまま色々したからか纏わりつく汗が気になって、アソコから
もたつぷり愛液が溢れてたし脚を伝ってたし、それにタップタブ揺れる胸の周囲が蒸れているよ
うな感覚があつて……。ともかく、僕が次に向かったのは風呂場だった。

ざっと軽くシャワーを浴びて気分も一新させるだけのつもりだったんだけど、散々弄って敏
感になっていたのがいけなかったのだろう。程よい温度の湯滴が全身を滑る。その感覚が本当

に今までと違って、何だかとても心地良くなって、いやもつと言うと全身を緩やかに愛撫されているような感覚なのだ。

「ふわあああ〜」

熱い歓声が自然と口から零れて、僕は一休憩のつもりで浴びたシャワーの下で再び乳房やアソコを撫でまわしてしまった。指先の刺激に加えて、今回はシャワーの勢いもあるから、生まれてくる快感もより大きい。それで身悶えてしまうのだけど、湯を浴びながらシているとすぐに息苦しくなってしまうた。

「ふう……一息ついてつと……」

お湯を止めて改めて身体を見下ろす。張り出した乳房がぶら下がっている光景は何度見ても不思議な感じだし、お湯を弾く瑞々しい肌がホンノリ桜色に染まっけていて美しい。だから僕はスポンジにボディソープをたっぷり染み込ませると、身体に磨きをかけてあげる事にした。

「んふうう」

勿論、敏感になった肉体には、柔らかなスポンジがとても心地良くて、またまた甘い声が上がってしまう。乳房の周りを緩やかに擦るのは凄く気持ちよいし、いやわざわざそんな場所ではなくても、例えば太ももとか二の腕とかを摩っているだけでもゾクゾクとした快感で蕩けそうだ。

洗う行為だけでもこれなのに、続いてはまたもシャワーを使って流す行為がある訳だ。そ

して水流の心地良さを再度体験し、今回は更にシャワーヘッドを使って身体の隅々を刺激しちゃって、アソコに当てた時のヤバイ感覚を知ってしまった。

「ひゃふううううう！」

奇声が飛び出すほどに強い刺激だった。ジンジンとアソコが痺れている。

だけど今までで一番の気持ち良さだったから、もっともっと感じたくなって、僕はシャワーの噴出孔を股間に押し当てると蛇口を捻っていた。勢いを増したお湯の刺激が、脳髄にまで到達する。奔流の一筋一筋が力強く、今の僕についている敏感な豆状突起物を荒々しく擦り、快感を絶え間なく生み出してくれるのだ。

加えて、湯の勢いは止まる事を知らないから、陰唇の内側をも同時に愛撫するし、更に奥へとドンドン入って……これは多分……おちんちんが入る穴、膣内までも進入されているのが解る。

「んふう……お湯に……犯されている……みたいだ……」

身をくねらせて快感に耽る。右手でしっかりとシャワーを掴み、空いた左手は乳房を弄り続ける。柔らかな触り心地は最高だし、強く揉んで捏ね回すのも楽しいし、乳首の感度もすでにマックス状態だ。いや、それどころか全身が性感帯になっているみたいで、飛び散るシャワーの飛沫が手足に当たる感覚ですらも気持ちよくなっていた。

だから僕は、快感につぐ快感の連続にただ喘ぐ事しか出来ない。いや、むしろそれがいいん

ばれる物だ。モロに男のアレを模した形状の物から、その辺に置いてあったオブジェが變形したお洒落な物まで様々だ。鏡に映るクールビューティーなお姉さんが、これを揃えて毎夜事に快感の宴を上げていると思うとゾクゾクと興奮してしまう。いや、だからこそ僕が代理行為をするのは全面的に正しいのだ！

僕は玩具の山の中から一品を取り出した。それは一見すると、理科の実験で使う大型スポイトのゴム部分だった。けれどもその吸引力が、クリトリスだけを効率的に刺激する逸品だという話だ。それじゃ早速、検証してみないとね！

パフパフと指先でその感触を確かめて、僕は鏡を見ながら慎重に股間の小さな突起物に先端を押し当てた。そして吸い口を帽子みたいにクリに被せる。そしてパフッと一吹きさせると吸着力が刺激となって、忽ちに快感が脳髓を駆け巡って甘い声が漏れてしまう。

「こ……これ……凄っ……」

柔らかなゴム製の先端が優しくクリに吸着し、まるで本当に誰かの口で舐め吸いされているみたいだ。だけでも、この吸われるっていう感覚は凄く気持ち良くて、僕はその快樂をもっと享受したくて何度も握る動作を繰り返す。そしてその度毎に生まれる新たな快感が生まれて、気持ち良さに鏡の中で芙美香さんが身悶える。

あっという間に、僕はアソコが潤うのを感じていた。既に何度も体験している女の人の『じゅんわり』ときちやう感覚は、男のとき以上に性的快樂を求めてしまう。

だからなのか……僕の視線は先程から大人の玩具群の一角に吸い寄せられていた。

それは男の人のアレを模したグロテスクな器具で、何種類かあって太さが違う。

今の僕は女なのだから、性的に興奮すればそれは当然男を求めてしまう訳で。それは理解できるんだけど、これらを入れてみようっていうのは、やっぱり抵抗があるし怖い。けれどもやっぱり興味はあるし、身体の奥底がソレを求めているのも解る。

「はあはあはあ……」

気がつくと僕は手に取っていた。一番細い棒状の物体で、電動したりしないタイプのヤツだ。形だつて先端こそペニスっぽいけど、全体的にはツボを押すヤツみたいだし色もピンクだ。入門用としてはこんな所からだろう。

マニユアルに従い棒の先端に Condom を被せると、僕は恐る恐ると唇を寄せた。そして先端にしゃぶりつく。そうやって濡らせという指示なのだが、視線を鏡に向ければ男のアレを頬張るエッチなお姉さんといった風体の映像が見られるから得した気分だ。

「けど……やっぱり怖いかな……」

充分に濡らしてから先端をアソコにセットした所で、僕は再び葛藤してしまふ。どう考えてもこんな太い物体が、小さな穴に入る訳がない。けれども当てられている箇所では、奥底でソレの到来を待ち望んでいるのも解る。

「んひひひいー！」

好奇心と誘惑とに負け、勢いをつけて突っ込んだから変な声が出た。自分の身体に入り込んでくる異物には、やはり嫌悪感が湧き上がるのだが痛みなんかは思った程では無い。いや内側から摩られるのが何だか心地良いような気もする。にゅぷにゅぷと愛液満載の膣内を突き進む卑猥な音も耳朶を擦り心地良いし、じゅぷじゅぷとした手応えも楽しい。

「あ……奥まで全部入っちゃった……」

これ以上進めませんと、コツンと突き当たる感覚が掌に伝わる。下腹全部に異物感が広がっているのだが不思議と痛みはなく、好奇心でグイグイと棒を揺らせてみても押し上げられる感覚がするだけだ。

「それで、これからどうするんだ？」

全部入れた所でなんとなく達成感で満足しそうなたけど、言うまでもなくこれからが本番だ。僕はスマホ画面に見入りながら、デイルドの出し入れに挑戦してみる。にゅぷにゅぷと卑猥な水音が再び響き、同時に中で擦られる感覚が広がっていく。それは内部から愛撫されているようなもので、脳内が緩やかな快感が満たされていく。

「んはあ……これもまた気持ちイイ……」

気持ち良い箇所を求めるように、ゆっくりと動かしていく。スマホには絶頂ポイントが書かれているけど、やっぱり自分の手で探り当てたい。

「あは……ココー!!」

入り口から程近い場所に正解があった。スマホ情報を元に先端部分をグリグリっと回転させてあげれば、ますます気持ちよくなって口から甘い吐息が漏れていく。アソコの奥からは更に愛液が湧きだしていくのが解るし、同時にクリも乳首もピンピンに立って痛いくらいだ。どうにかしてあげたいと思って、ふと視界に映ったのは、先程お世話になったクリへの攻撃兵器だ。これを使って同時攻撃したらどうだろうか？

我ながらの素晴らしいアイディアに打ち震えたけど、実はそれが芙美香さんの日常オナニーだと後で知る事になる。身体に染み付いていた習性がそうさせたのかも知れないね。

僕はスポイトゴムを手に取ると、少し迷ってからその先端を乳首に被せた。そして一吹きさせてみれば、この世のものとは思えない快感で軽くイってしまう。

ヤバイ。ヤバイ。このコンボはヤバイ。

右手でジュポジュポっと音を響かせて膣内をスポット攻撃し、左手では世話しなく持ち手を握っては乳首を吸わせる。もう何が何だか解らなくて気が狂いそうな位に気持ちイイ！

気がつくと僕は仰向けで寝転がっていた。快樂の余韻で痺れる頭を持ち上げて起きれば、鏡の中には蕩けた目つききの芙美香さんが見返してくる。アソコにはエッチな棒を生やしたまま、溢れたエッチ汁が妖しい輝きを放っている。淫らな光景を客観視して、頭の中に残る快感が再爆発してしまいそうだ。

こんなにも気持ちよくなれる肉体を貸して貰って、芙美香さんには感謝の言葉で一杯だ。ど

う考えても僕の肉体なんかとでは不釣り合いにしか思えない。感謝の気持ちを胸にしなから、僕はもっともっと気持ち良くなる為に次の道具を選ぼうと、まずは情報収集だとスマホを取り出した所でメールの着信がある事に気がついた。

『FROM…衣月 雁斗』

はい。私の肉体で楽しんでくれてる？

こっちも雁斗君の身体を存分に楽しんでるわよ。

男のオナニーって単純で爽快で楽しいね！』

僕になった芙美香さんからのメールだった。画像が添付されている。

「えっ!？」

添付されていた写メを見て、つい声が上がってしまった。それは僕の自画撮り画像で、いや、芙美香さんが僕の身体を使って撮影したものだ。そんな『僕だけじゃなく僕が、裸で硬直させた欲望を扱っている。要するにオナニー姿を自画撮りした写真なのだ。こんな物を送りつけられても困惑するだけだ。

ただだというのに……

何故だか僕の眼は、その写真に引き寄せられていた。胸がドキドキと高鳴るし、棒が入ったままのアソコが潤ってくるのが解る。ひよっとしなくても、身体は女だから男を求めているというのだろうか。自分の裸なのに可愛らしいなんて思っちゃっているのだろうか。

気がつくといつの間にか僕はオナニーを再開していた。スマホに映った写真を眺めながら、ゆっくりと棒を動かしていく。けれども流石に何度もしていたからか、動かす手が重く感じる。それで思いついて、玩具の一群から新たなアイテムを取り出した。それは電動でバイブレーションするタイプの棒だ。まだ怖くて一番細いのにしたけど、それでも今使っているのよりは正しい。

早速差し替えてスイッチを入れれば、振動が凄く心地良くて、何でもっと使わなかったんだと思ってしまう。いや本当に凄くて、機械に喘がされてしまうのだ。それから乳首にも刺激が欲しくなって、同じく電動のローターってヤツを使ってみる事にした。複数あるから両乳首を同時に攻める事も出来る。

「これ凄っ！」

本当に驚きの連続だ。気持ち良さに限界が無いんじゃないかと言う位に、世界が変わるような快感だ。電動の刺激に身を振じらせながら、スマホの画面を眺めれば興奮が沸き起こってくる。擬似的に男に犯されている幻想さえする。その妄想相手は元の自分だ。あまりにも倒錯した妄想が脳内で渦巻いて、それが本当に焼けきれらんじやないかって位に気持ちイイ。

何度も連続してイって、ぐったりと倒れこんでしまう。一息つかないと身体が持たないから、スイッチはオフにしよう。それでも、まだ震えているような感覚が残っている。息を整えながら何度目かの余韻に浸り、僕はボンヤリと芙美香さんにお礼をしなくちゃと思ひ、電動オナニー

中に撮影した自画撮り写真をメールしてあげるのであった。

次に眼を覚ますと翌日になっていた。いや、勿論目覚めた瞬間には解らなかつたけど。

ボンヤリとした意識のままに激しい尿意を感じて、起き上がって一步を踏み出して、一瞬の戸惑いを覚えた。何しろ胸が弾むように揺れ動くんだもの。この感覚は未だに慣れないのと同じに、今の状況……芙美香さんの肉体になっているって事を雄弁に語ってくれた。

けれども寝惚けたままだったからか、トイレに入って便座を前にして、男の習性でアレを掴もうとする空振りで若干の混乱をきたしてしまふ。普通に立ったまま用を足せないのは、やっぱり少々不便だね。眠気で欠伸を噛み殺しながらも、女の身体で小便するのはまだ二回目だから珍しくてつい観察してしまふ。

ようやく落ち着いてみれば、お腹がペコちゃん状態である事に気がついた。それはそうだね。昨晚あんなに何回も絶頂したから、体力も相当消耗している筈だ。それで食事にしようと思っただけど、その前に全身がベトついている感覚が襲ってきたから、まずはシャワーを浴びる事にする。

そしてシャワーを使えば昨夜の体験がフラッシュバックして誘惑する訳だ。

そんなものには負けない！

って思うんだけど、ついつい軽く弄ってしまっ。だけど本当に空腹だから、本当に軽く撫でるように触ったりしただけだ。それから朝食を摂ろうとスマホを覗き込んで、時間が既に昼近くなっていた事を知った。そりゃあ空腹なのは当然だ。

マニユアルに目を通しながら、適当に冷蔵庫の中身を取り出したりして朝食兼昼食を済ませて落ち着いてくると、さてとこれからどうしようかと思案する。いつもならば学園に行ってる頃合なので、ズル休みしているみたいで何だか落ち着かないのだ。今頃、僕の替わりに芙美香さんが登校しているのだろう。では僕の方では替わりに何をすればいいのだろうか？

本業であるモデルの仕事はオフであるらしいし、副業である執筆業なんて出来るわけもない。またオナニーに明け暮ればいいのだろうか。いや、でも何かちよつと違う気もするなあ……そんな風に思案を巡らせていると、今更ながらに裸のままだつて気がついた。

「そうだよ着替え！」

僕のピンク色の脳細胞が活発に動いた。今なら色々な下着姿を堪能できるのではないか。自分で装着する訳だから少し虚しくもなくもないが、この肉体をアレコレ着飾らせてみたいと思うのも事実だ。そうと決まればまずは素材集めだ。僕はスマホを片手に立ち上がる。

「うわあ……何だか凄い事になっちゃったぞ！」

掻き集めた布の山がベッドの上に連なっている。とりあえず下着の山からパンティを一掴みして、しげしげと観察してつい頬ずりなんてしてしまう。それから鼻を近づけてみたけど、普

通に洗剤とか柔軟剤の匂いだった。流石に頭に被ったりはしない。きちんと股の間に装着するんだけど、こんな小さな布で大丈夫なのか？

みょーんと思いの外伸びてビククリしてしまう。破れたりしないのか心配になりながら脚を通していく。結論から言うと大丈夫だったのだが問題はあった。股の間にピッタリと張り付くのが落ち着かないし、大きな僕のお尻に食い込むのもまた然りだ。けれども鏡に映る、少ない布に覆われた股間の姿は、とてもエッチで素晴らしい。

続いてブラを装着しようと思ったけど、これはマニュアルを見ないと不可能だった。逆向きにしてホックを止めてから回転させる方法とか、こんなにぎゅうぎゅうつて乳房をカップに放り込むなんて初めて知った。ずっと自然のまま重力に従って乳房を晒したままにいた所為か、肩紐を起点として重さを凄く感じるし、締めつけられて窮屈で息苦しく感じてしまう。

「でもまあ……芙美香さんの下着姿凄くエッチだよなあ……」

つついポーズを取ってウインクして、スマホの機能で撮影までしてしまふ。さてと、この上に何を着せてみようか。僕は続いて衣装の山へと目を下ろす。清楚なワンピースとかもいいけど、ブラウスにタイトスカートなんかを合わせて女教師とかOL風なものもそる。短い上着とか袖なしのとかにミニスカートで際どい感じなものも試してみたいし、何故かあったセーラー服やらチャイナドレスなんていうのも是非やりたい！

ええーい。片っ端から試してやれ！

僕は一着を手にとるとスマホを見ながら着用していく。

そうやってチアリーダー風なんていう組み合わせを試していると……不意に耳が電子音を捉えた。これはまさか呼び鈴なのか。どうしたらいいか解らずに右往左往するが、スマホ情報で来客時にモニタで確認する方法を知って、とりあえず出てみる事にする。単なる届け物かもしれないし。セールス風なら断ればいいんだし。

「はーい芙美香、今暇よね？」

モニタの向こうで見知らぬ美女が、笑顔を見せながら開口一番にそんな台詞を口にする。僕が返答に困っていると、スマホからシャッター音が聞こえ画面に相手のプロフィールが表示されていた。自動認識機能ってやつなんだろうか。ちよつと怖いが今は有難く力を借りておこう。

「ちよつと立て込んで……ごめんなさい、由梨さん。また今度で……」

情報によると高科たかしな 由梨ゆりという名前で、芙美香さんのモデル仲間だという。

「ええ〜！？ またまたあゝ 用はすぐ終わるからさあ〜」

見知らぬ知人と相対するなんてどう考えても無理だから何とか断りたいのに、相手も何故だか引き下がらなくて、結局の所入室するのを許可してしまった。

こうして僕の優雅な午後は終焉を迎え、変わって芙美香さんを演じる舞台に急遽立たされる事になった。けれども、これが新たななる体験への幕開けとなるのだ。

つづきは製品版でお楽しみください。